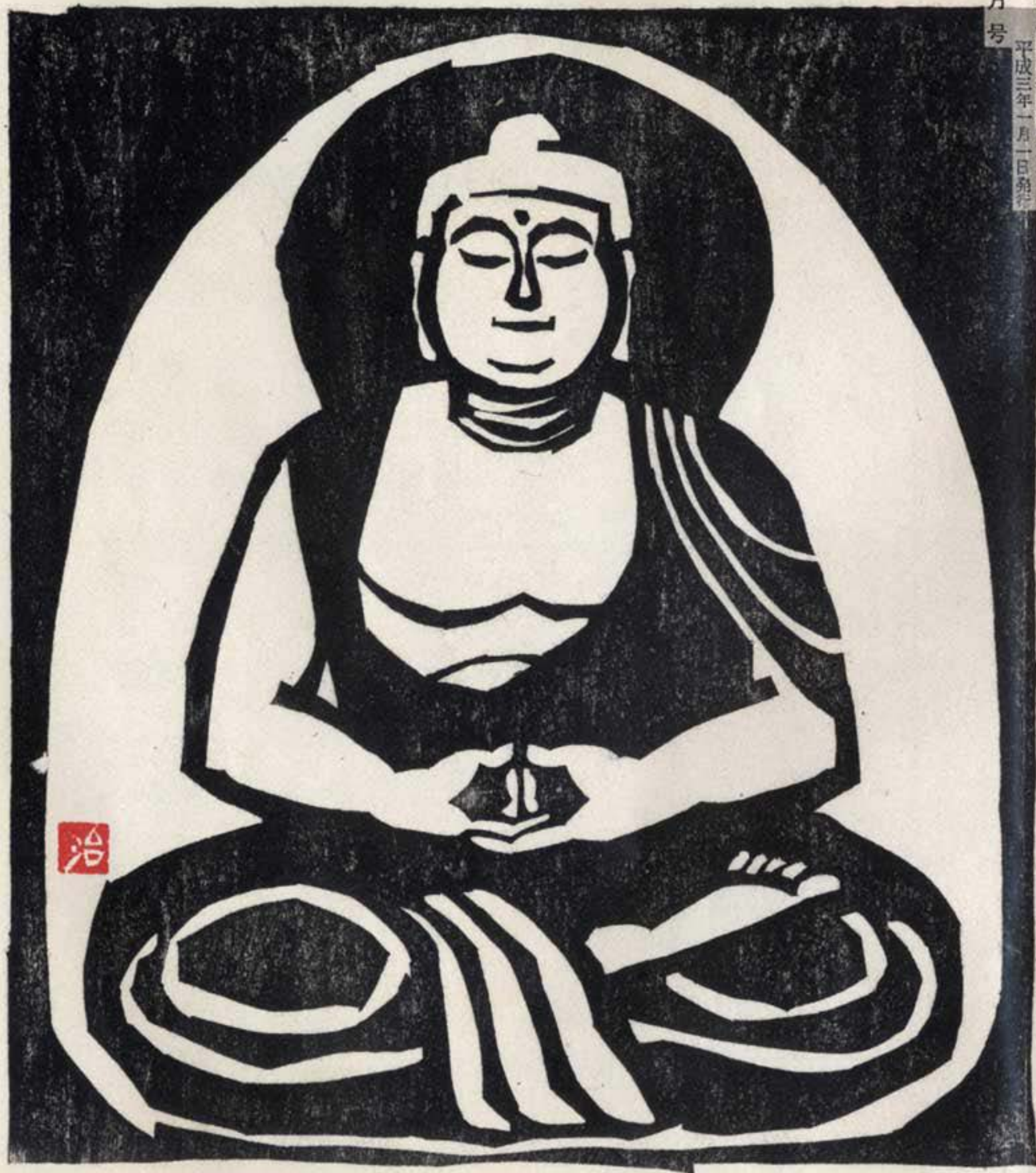


浄土

1991-1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
平成二年十二月二十五日印刷
第五十七卷
正月号
平成三年一月一日発行





正月の秀句

年改まり人改まり行くのみぞ

高浜 虚子

一月の川一月の谷の中

飯田 龍太

足のべて正月古き豊かな

松岡 草羊

正月号



廻向発願心と云うは、自他の行を
真実心の中に廻向発願する也。

——『念仏大意』

目次

新春随想

念仏の春.....竹 中 信 常.....(2)

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

お正月を写す.....ぬのむらてつや.....(9)

羊年史談.....細 田 隆 善.....(16)

季語やぶにらみ (9)

初 詣

.....木 下 隆 一(29)

◇◇ 連載・話の旅(六) ◇◇

超常物語 ③.....松 浦 行 真.....(36)

表紙絵 小林治郎画

(新)

(春)

(随)

(想)

念
仏
の
春



一

いかに寝て起くる朝にいう言ぞ

昨日を去年今日は今年と

いつものように寝たのだが、どうしたことか、一夜明けると昨日は去年に、そして今日は今年になっていた。年末だ、正月だという

小大君

(浄土宗総合研究所長・文博)

竹中 信常
たけ なか しん じょう

が、それは人間が勝手に、時の流れを区切っていることである。時は少しのよどみもなく淡々として流れて行く。

午歳が羊歳になり、二十一世紀に一步近づいたわけであるが、それも、ふり返ってみれば、過ぎて来た長い過去の積み重ねの上のこととて、今日になって突然と、新年、正月が来たわけではない。ことに、われわれ浄土宗のものにとっては、今から一八一六年の昔、承安五年（一一七五）法然上人が浄土宗を開かれてからの長い歴史の結果、今日を迎えたのである。

二

その歴史の中にはさまざまなことがあった。

ことに正月は、浄土宗のものにとって大変重

要な意味がある。

浄土宗の念仏の教えには非常に深い意味があるが、その深い意味をわれわれ凡夫にわかりよく、しかも余すところなく、非常に短い文章にまとめて下さったのが宗祖の法然上人である。

これを書かれたのは建暦二年正月二十三日のことである。

建暦二年（一一二二）は今年から数えて七十九年前である。法然上人のひろめられた念仏の教えは、年老いたもの、病気に悩むもの、幼いもの、時には悪いことばかりしているものなど、すべてのものが、すなおな心で阿弥陀仏の建てられた四十八の願い、特にその十八番目の、

「まごころを以って、阿弥陀仏のお浄土に

往生しようと思ひ、一遍もしくは十遍の念
仏を唱えれば、必ず浄土に生れ、完全な人
間となり、何のわづらわしさもなく生きて
行くことができる」

というお誓いを信じて念仏しなさいというの
である。むづかしいお経を読んだり、つらい
修行をしなければならぬと思われていたそれ
までの仏教は、学問もあり、身分も高い極く
限られた人々のものとされていた。それが、
学問もいらぬ、身分も問わず、誰でもが、い
つでも、どこでも唱えることの出来る念仏
さえ唱えれば、たとえ悪いことをしたもので
も阿弥陀仏の力によって浄土に生れることが
出来るというのであるから、当時、むづかし
い仏教を教えていた多くの仏教者にとっては
とんでもない教えだと受け取られ、時の政府

にたのんで念仏の教えをひろめぬようにと訴
えたのである。しかし、法然上人は、自分の
説かれた念仏の教えこそ、多くの人々を救う
ただ一つの道であるとされ、

「われ、たとえ死罪におこなわるとも、こ
のこと（念仏）いわずばあるべからず」
と申され、少しもひるむところがなかったの
である。そこで政府もやむを得ず、法然上人
を、はじめは四国の土佐に流罪することとし
たが、実際にはそれより近い讃岐に配流した
わけである。

出発に当って、それまで陰に陽に法然上人
の身を案じていた関白九条兼実公、

ふりすててゆくはわかれのはしなれど

ふみわたすべきことをしぞおもう

という一首を贈った。上人はこれに応えられて、

露の身はここかしこにて消ゆるとも

こころは同じ花のうてなぞ

と返された。

はかない現世の命はいつどこで消えるかも知れないが、浄土往生を願う心さえあれば、必らず極楽の同じ蓮華の中に生れるであろう。流罪を受けて遠い国で死のうとも、来世には極楽の花の上でお会いできるでしょう。

法然上人は行く先々で、農夫、漁師、遊女など、身分の上下などいささかの差別なく、念仏の教えをお説きになった。また、法然上

人が流罪になっても、あとに残った弟子たちがそれぞれに念仏を弘めたので、

「(日本) 六十余州、念仏の声に埋まれり」

と、日蓮聖人がおどろかれたほどさかんであった。そして、法然上人の教えが真実の教えであることが知られるようになり、一年たたぬ内に流罪が許されて、摂津の勝尾寺(現在の大阪府箕面市)まで帰ってこられた。勝尾寺にとどまること四年、その間も多くの人々を教化されたが、いよいよ京都に入ることが許され、建暦元年十一月、現在の知恩院の東山のふもと、勢至堂のある地に庵居を定められたのである。

翌年、建暦二年正月二日、八十歳になられた法然上人は、流罪の不自由、長途の旅の疲れなどの心痛が重なり、病いの床につかれる

ようになった。

病床にあっても、つねに念仏を唱え、ときには枕頭に弟子たちを集め、教えを説かれたりした。しかし、病勢がだんだんすすみ、どうやらご臨終も間近に迫って来たことを心配した弟子の一人、十八年間もおそばについてお世話をして来た勢観房源智が、

「わたしども年来上人からいろいろと教えを受けて参りましたが、出来ますれば御自筆にて、一番大切な要点をお書き下さるようお願いがい申します。これをのちのちの御形見とし、多くの人々に念仏のありがたさを教えたいと存じます」

とお願いしたところ、こころよく承知され、床の上に起きなおり、筆をとり、半紙一枚にさらさらとお書きになった。

もろこしわが朝にもろもろの智者たちの沙汰し申さるる観念の念にもあらず。……念仏を信ぜん人は、たとえ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし

これが、浄土宗にとって、教えの根本を簡明に言い尽した至重の文章、「一枚起請文」である。

浄土宗では、扇子にたとえて、

「ひらけば三部経 たためば選択集、かなめは一枚起請」

といって、浄土の教えは、『無量寿経』、

『観無量寿経』、『阿弥陀経』の三つのお経に説かれている。それをまとめて、念仏についての教えを述べたものが、法然上人六十六歳の時にお書きになった『選択本願念仏集』である。それをさらにつづめて半紙一枚にまとめたものが「一枚起請文」ということになる。これを一滴飲めばたちどころに効くといういわば浄土の教えの精髓つまりエキスである。それほどに深い意味を持つ一文であり、平常は口の悪い一休禅師さえも述べている。

「伝え聞く、法然活如来、安座す蓮台上品の台。尼入道も愚痴のやからと同じく一枚起請文。九年まで坐禅したところそ悔しけれ。まことの時は弥陀の一声」

世間の人々は言っている。法然上人は生き仏さまだ。極楽の蓮の座に坐っておいでにな

っている。尼入道の無知の人々も、すべて一緒に「一枚起請文」をよめば浄土に生れることが出来る。わたしはそれを知らなかったため九年も坐禅してしまった。まことに残念である。いざというときは、南無阿弥陀仏の一声でいいのだ。

一休さんは残念がっておいでになる。

「一枚起請文」を書き終えられた法然上人は、再び横になられ、念仏を唱えつづけられた。中一日おいて、二十五日の正午頃、法然上人は慈覚大師伝来の袈裟をおかけになり、頭を北に顔を西にむけられ、「光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨」とお唱えになり、眠るが如くに往生された。御年八十歳、くしくも釈尊の涅槃と同年令であり、しかも、亡くなった日のえとが壬申（みづのえさる）で

同じであった。

三

今上天皇の即位式、そして大嘗祭も大過なく終った。イラクの人質も無事解放された。

旧年もすべてがまづまづ順調に終り、まことにおめでたい正月を迎えることができた。これもひとえにみ仏の大いなるご慈悲のおかげである。しかし、そうだからといって、有頂天に喜んでばかりはいられない。経済大国だとおだてられて、あちこちに金をばらまいたり、よその国から押しつけられていりもしないものを買ったり、そうかと思うと、国外の企業を丸ごと買ったり、土地を買ったり、とに角、湯水のようにお金を使う。国内でも、気の遠くなるようなお金が、ワイロだの、不

正融資だの、詐欺だのに使われている。

一体、こんな沢山のお金や物は誰がつくってくれたのか。みんな、わたしたちの親や先祖が汗水たらして作り上げた財産にほかならない。それを、いいわ、いいわと使っていていいのだろうか。

正月早々から言いたくないが、はるか昔地中海一帯から、はるか東洋にまで領土をひろげ、大帝国となったローマがなぜ滅びたのか。それは結局、あり余った財産を無闇に浪費したからにほかならない。

一声、一声の念仏の積み重ねで、今日まできたわたしたちは、やはり、一声、一声の念仏の力で、この世の中を地道にすごしてきたいものである。

なむなむカメラ (一)

お正月を写す



ぬのむらてつや

「さあ みんな集って集って」

おとうさんが大きな声でよんでいます。

けんちゃんが おやつのケーキを口の中へ

おしこみながら入ってきました。

「なんだ まだみんな来てないじゃないか。

もうひとつ食べてこようっと」

出て行こうとしたけんちゃんに カメラを三脚にとりつけようとしていたおとうさんがいます。

「それじゃあ 台所にいるおかあさんも 部屋にいるみよこも こっちへ来るようにいつてくれないか。お正月の写真を撮るからってね」

台所へ行くと おかあさんは食事のあとかたづけをしています。

「おとうさんが写真を撮るからって」

「はいはい でもこれではね」

エプロン姿のおかあさんは、ぬれた手で髪の毛をなでつけながらいいました。

子ども部屋では お年玉で買った着せかえ

人形とあとんでいる妹のみよちゃんに声をかけると 気のない返事で

「はあーい いま行く」

ふたつ目のケーキを食べたけんちゃんが おとうさんのまっている部屋へ入っていくと そなえつけたカメラで だれもすわっていない床の間のほうを見ていたおとうさんが いらいらしているようにいいます。

「早くみんな来て すわってくれよ。ピントをあわすこともできないじゃないか」

こうして 家族そろったお正月の写真がとれたのは しばらくたってからでした。

まちくたびれたおとうさんは もういいよといった顔で カメラをけんちゃんに手わた

すと

「けんた あと一 二枚フィルムがのこっているの 何かすきなものを写してから写真やさんへ持って行って 焼きつけまでのんできておくれ」

といいながら 三脚の道具どなをしまっています。

きゆうに何かを写せといわれても こまっ
てしまうものです。

食べたいとおもっているケーキの写真を撮る
っても ケーキがふえてどんどん出てくるわ
けでもありません。

妹のみよちゃんへレンズをむけても

「わたしとわたしのお人形さんを 王子さま

とおひめさまのように写してくれなければい

やよ」

というにきまっています。

おかあさんのところへカメラを持って行け
ば

「だめだめ こんなかつこうじゃあ」
と向うをむいてしまうだけです。

こまっってしまったけんちゃんは カメラを
ぶらさげて外へ出ました。

お正月やすみで町はずかです。自動車も
あまり走っていません。友だちの姿が見えな
いのは お年玉で買ったテレビゲームにみん
な熱中しているのでしょう。

お正月ぐらいいは 子どもも自由にあそびた

いのです。

地面にカメラを向けてみましたが この寒さでは虫など一びきもいません。黒いアスファルトの道路がつづいて見えるだけです。

道ばたの葉をおとした木は によろによろとのびた針金細工のように冬の空にうかんでいます。

けんちゃんが なにげなくレンズを木の枝のせんたんから青い空の一点へうごかした時です。

ピカリ！

目がくらむような するどい光がカメラのほうへ向ってきました。まるで十個の太陽が

一度に光ったみたいです。フラッシュの光などくらべものになりません。

とても目をあけてはいられないほどの強さだったので けんちゃんはおもわず

「なむなむ——」

といいながらカメラのシャッターをおしてしまったのです。おどろいたときとか困ってどうしようもないときには いつも “なむなむ” といいながら手をあわせるくせがあるけんちゃんだったのです。

小さい子どもときから おじいちゃんやおばあちゃんやおとうさんやおかあさんが手をあわせるのを見ていましたから。

“カシャ！” シャッターのおちる音がした

瞬間 足が地面からうきあがったかとおもう
と けんちゃんのからだか みるみるうちに
カメラの中へすいこまれていくではありませ
んか。

まるで宇宙ゆうえいをしながら 深い長い
トンネルへ入って行くようです。

それでも ちっともこわいとはおもいませ
ん。

なぜなら そばにだれかがいて 手をしっ
かりにぎってくれているようにおもえたから
です。しかも それはあたたかでした。

いくらか速度がおそくなり ふわふがと無
重力のようになったとき 足が地についたの
です。

「さあ なむなむカメラの国に到着ですよ
けんちゃん」

「ええーえ。ここはー どのなの。きみはー
いったいだれ。どうしてぼくの名を知ってい
るの」

声はしても その姿が見えないのですから
びっくりするのはあたりまえです。

「けんちゃん ごめんなさい。しんぱいする
ことはありません。自己紹介がおくれました
が あなたのそばにいるのはピカリのなむな
むです。どうぞよろしく。見えなすすみま
せんが ごあんしんください」

そういわれて 少しほっとしたけんちゃん
は そばにいるらしいピカリのなむなむを手

でさがそうとしました。

「だめなのです。わたしには見えるからだも
さわれるからだもないのですから」

「ではどうして ぼくといっしょになってこ
んなところへ来てしまったの」

「それは こうなのです。ピカリのなむなむ
という名のわたしは いつもみなさんのまわ
りでピカリピカリと光っているのです。お日
さまのように お月さまのように お星さま
のように 宇宙船のように 電気のように
火のようにね。ところが けんちゃんはわた
しと知りあいになることをしてしまったので
す。

さつき家の前の道ばたでカメラのレンズを

空へむけたでしょう。そのときピカリとひか
ってその一瞬 けんちゃんが「なむなむ」と
いいながらシャッターをおしたのをおぼえて
いますか。とっさのことで もうわすれてい
るでしょうが ピカリのなむなむというわた
しは 自分の名前をよばれてシャッターがひ
らいたものですから おもわずカメラの中へ
とびこんでしまったのです。そして シャッ
ターをおしたあなたといっしょにここへきて
しまいました」

「それでは ここはカメラの中なの」

「そうですよ。ここはひかりの世界です。ほ
ら見てごらんなさい。けんちゃんのうちの家
族です」

カチャッという音といっしょに写真が一枚
づつ動きます。

それはおとうさんが写したばかりのお正月
のフィルムのようにです。でもふしぎなことに
は、そこに写っている写真の姿と、けんちゃ
んの家でじっさいに写した写真の姿がちがっ
ています。

はじめのフィルムには、けんちゃんの口の
まわりをぐるぐるとびまわるケーキ。つぎ
に写ったのは、雲の上のお城でお姫さまにな
っている妹のみよちゃん。そのつぎは、美容
院からかえってきた若々しいおかあさん。さ
いごは、ボンボン時計においかけまわされて
いるおとうさんです。

「けんちゃんは、よっぽどくいしんぼうなん
だね。このなむなむカメラはなにからなにま
で写してしまうのです」

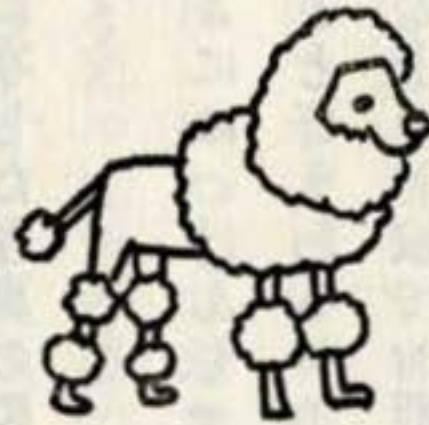
ピカリのなむなむにいわれてはずかしくな
ったけんちゃんが、あわててシャッターをお
しました。

カチャッ！

カメラをぶらさげたけんちゃんは、自分の
家の前に立っていたのです。

(つづく)

羊年史談



平成三年は干支えとの上から辛未かのとひつじであるので、未年といい十二支にあてると動物の羊でありますので羊ともいいます。時間の上から未は午後二時をいいます。また午後一時から同三時ま

での二時間をいいます。方角では南々西をいいます。本年は西暦一九九一年、仏誕暦では二五五七年、あと九年で二十一世紀になり、昭和以来六十六年、大正以来八十年、明治以

細ほそ田だ隆りゅう善ぜん

来百二十三年になります。あと九年で二十一世紀です。

干支は兄(え)と弟(と)の意味を持ち、十干と十二支を配した暦数のことです。木、火、土、金、水の五つを兄弟に配し、甲(きのえ)乙(きのと)、丙(ひのえ)、丁(ひのと)、戊(つちのえ)己(つちのと)、庚(かのえ)辛(かのと)、



— 羊の古代文字 —

壬(みずのえ) 癸(みずのと) の十干に子(鼠)、丑(牛)、寅(虎)、卯(兎)、辰(竜)、巳(蛇)、午(馬)、未(羊)、申(猿)、酉(鶏)、戌(犬)、亥

(豕「いのしし」)の十二支を配してこれを組み合わせ、辛未(かのとひつじ)とし、六十年で一廻りする。

羊の文字は羊を型どった象形文字から生れ角のある頭部と胴と四足、尼尾を組み合わせてできた文字、羊は跪いて乳を飲み、仰いで礼をする礼儀正しい動物であり、群れをなす



— 羊の石製小像 —

エジプト・六千年前 —

ところから、群、祥、善、美、義、羞、羨などの文字は羊の文字からできました。未の文字は木の梢に実がなっている形を



——牡羊の神様（エジプト・アメンホテプ三世建立の
アメン神殿八紀元前一三八〇年）——

象形文字にしたもので、未来や未だの意味を持ちます。羊と未が同義になったのは、未がビ、ミと発音し、羊の鳴き声に通ずるからといわれています。

羊は哺乳類偶蹄目ヒツジ属の家畜で、八千年前野生の羊を家畜化したもので、人類にとってもっとも古い家畜です。

イラン北部の野生種の羊が家畜化されて世界にひろまりました。羊は毛用、肉用、乳用、毛皮用として多目的に使用されてきました。羊は高燥地を好み、雑草はなんでも食べます。羊は群集性が強く、追従性が鋭いので放牧に適し、一人の羊飼が数頭の犬を使って二千頭の羊を飼育することができるといわれています。十年前モンゴル人民協和国

を訪れたことがあります。大草原に羊の群れ、牛の群れが草を食べていて、牛が草を食べたあとを羊に食べさせていました。これは羊は牛の食べたあとの短い草を食べることができるからです。

中東イスラム社会では羊はガナムと呼び重要な家産であるので、そのコーラン中にも羊はでてきます。またキリスト教もその発生地が古来羊を多く飼育していたので、聖書の中で最初に出てくる動物が羊です。聖書には五百回以上も羊が引用されています。しかし仏教発生のインドでは牛はたくさん飼育されているが羊は少ない。仏教の中に羊が引用されている例はまれであります。法華経譬喩品に三車さんしゃの譬があります。長者の家が火事になり、火事に気づかずに家内に遊んでいる子供を助

け出そうとして「門の外にきれいな羊車ようしゃ、鹿車ろくしゃ、牛車ぎゅうしゃがあるから、早く外に出て遊びなさい」ととなりました。子どもたちが外に飛び出てみるとその三車よりもすばらしい大白牛車だいはくぎゅうしゃがあつたので、これに乗り火災からのがれることができた話です。これは三界を火宅かたく、三車を声聞しょうもん、縁覚えんかく、菩薩の三乗さんじょうにたとえ、大白牛車を仏にたとえた説話です。

地獄の中に羊鳴地獄ようめいじごくがありますが、この地獄に落ちたものは身体がいためつけられて苦しみ、言葉が出ないので、羊の鳴く声にた泣き声しか出ない地獄のことです。また薬師如来の十二神将の波夷羅大将はいいらだいてうは頭上に羊をいただき、羊の神といわれ、薬師如来を守護する仏神です。

仏像の中で羊が取り入れられているのは少

く火天だけです。羊は古来、未来を予知する神秘的な動物として占いにも使用されてきま



— 火天（インド古代仏像・

青い羊に座している） —

した。仏教以前の古代インドでは四千五百年前のリグ・ベーダの時代にベーダの三神の一つ、アグニ神として広く信仰されてきました。アグニ神賛歌数はベーダの中でも五分の一ほどもあります。アグニ神は天上では太陽、空中では稲妻、地上では祭りの火またはカマドの火として、神と人との中間の神、悪魔を払う神として信仰され、仏教の中に取り入れられて火天となりました。火天は仙人の姿をし、身体は赤色、火焰に包まれ、青い羊に乗っています。青い羊は羊座ひつじぎと縁りがあり、火が人類発見の貴重なエネルギーであり、かつ太陽の恩恵等を神格した神です。火天は十二天の一つとして仏教を守護する神とされてきました。

昔から生涯十二支の守り本尊としまして、

未年生れの人は大日如来だいにもたよらいを守り本尊としました。

わが国では古来、鹿や羚羊かもしかはいたが羊はいませんでした。鹿と羚羊は俳句の季題になっているが、羊の季題はない。また羊は全国郷土玩具にもない。日本書紀や古事記にも羊の神話はない。また万葉集をはじめ古今集等にも羊の歌はない。羊が記録にでてくる最初は、日本書紀二十二卷推古天皇七年（五九九）九月一日、朝鮮百濟くだらから駱駝らくだ一匹、羊二頭が献上されたとあります。当時は駱駝も、羊も大変珍らしい動物でありました。

ヘルシヤ地方の美術品には優れた羊の作品があり、わが国に伝来しました。奈良正倉院の御物ごぶつに、羊木藹縷屏風ひつじき あうけもびようぶに羊の絵があります。古代イランにおいて羊の角が三日月形になっ

ていることから、羊を月の動物として尊重し、囲りに樹木を配する絵があります。この屏風は真中に野生の羊を大きく描き、上部に明るい樹木、下部に山岳を配して染め出したもので羊の紋様としての優れた作品、幅は五六センチメートル、高さは一六三センチメートル、羊の高さは六一センチメートルです。この屏風が斉衡三年（八五六）の目録にあることから、古いものであることは間違いありません。同御物の中の金銀花盤かばんに花形に開いた角をつけた羊が打ち出されています。また同御物の中に羊の紋様をあしらった綿織にしきおりがあります。

和名抄わみょうしりょう（承平四年八九三四▽編）に「比豆之」は羊なりとあります。日本紀略（平安後期）に弘仁十一年（八二〇）五月、朝鮮新羅しんらから羊が献上されたとあり、また承平五年（九三五）五



——大日如来像（羊年生まれの人の守り本尊）——

月、大唐吳洲人が羊を献上したとあります。

羊を飼育していないわが国では羊は珍らしい動物でした。また承保四年（一〇七七）六月十八日、高倉殿において羊を天覧に供したとあります。^{ひやくれんしやう}百練抄（鎌倉後期）に承安元年（一二七一）七月二十六日、平清盛が羊五頭を献上したとあります。

^{どう}道十二宮の一つ、黄道は太陽が天球上を西から東へ一年かけて一周する道すじ。ギリシヤ神話によると父王に憎まれた兄妹フリイソスとヘレを乗せて黒海東岸のコルキスまで飛ぶ金毛の牡羊で、途中妹のヘレを落したところ^{どろ}が現在のマルマラ海という。ギリシヤ時代には春分点はこの星座であって、牡羊の原点といわれました。しかし現在では春分点は牡羊座の東隣の「うお座」に移っています。牡

羊座は赤色の巨星であります。

江戸時代、長崎に羊が飼育されていました。^{ここんやうらんこう}古今要覽稿（文政四年八一八二一〇から編）に中国人やオランダ人が食用に供するため羊を飼ったとあります。伊豆海島風土記^{いづかいとうふどき}（天明元年八一七八一〇編）によると伊豆大島に羊がいたが、これは幕府が放った二頭の羊が繁殖したものであるとされています。

幕末から羅紗緬（ラシャメン）という言葉が流行しました。羅紗は毛織物、緬は緬羊、羊のことで、ポルトガル語の羊毛毛織物のことですが、当時外人の妾をランヤメンといいました。下田のアメリカ領事ハリスは安政四年（一八五七）五月から芸者お吉を年間百二十両で契約し、毎夜玉泉寺^{ぎよくせんじ}に通わせたので、お吉をランヤメンといいました。ランヤメンの起

りは、西洋の船乗り水夫たちが、長旅の船中に牡の羊を飼育しダッチワイフの役をさせたことからです。遠洋航海者だけでなく、古来遊牧民族が、牡羊を性の対象とした例は少くありません。インドの古典カーマストラにも記るされています。

明治八年、政府が下総六里ヶ原（成田空港付近）に三千五百町歩の緬羊牧場を開設したのが緬羊飼育の最初です。ついで明治十一年九月十五日、千住（荒川区）に製絨所せいじゅうじょを創業したのが、羊毛織物工場の最初であります。そこにはドイツ留学から帰朝した井上省三に工場



——正倉院御物「羊木藤緬屏風」(一部)——

を運営させたものです。

六世紀にエジプトの羊飼のカルデイは、ある日放牧していた羊が、美しい木の実を食べ、興奮しているのを発見しました。カルデイは毒味のつもりでその実を食べてみると、し



——正倉院御物金銀花盤の羊（部分）——

だいに元気になり壮快な気分となりました。

カルデイはことを回教僧に話をし、僧もまたこの実が壮快であることを知り、いままで夜の勤行に居眠りが多かったが、この実のせいで眠らない寺院として有名になり、全回教徒が愛用するようになりました。酒を飲むことを禁じられている回教徒は酒の替りにこれを飲むことが流行し、酒の名をとってこれをカフワというアラビア語をつけました。これがトルコに広まりカフウェと称し、十七世紀にはヨーロッパ各地に広まりコーヒーまたはカフェとなりました。

エジプトは古代から羊を飼育し、六千年前の羊の石製小像が保存されています。また牡羊は神の一つとして祀られ、アメンホテプ三世（紀元前一三八〇年）の建てたアメン神殿から



——正倉院御物狩獵文銀壺の羊（部分）

（天平神護三年〈767〉2月4日の刻銘あり）——

牡羊の神像が出土しています。

江戸時代まで羊は飼育されていなかったの
で、万葉集以来歌集には羊の歌はありません。
しかし夫木和歌抄（延慶二年八一三〇九頃編）
にひつじの歌が二首あります。卷十九に光俊
朝臣（建治二年八一二七六〇没）の歌、

もえつづくかうのけぶりのときうつり

羊のあゆみけふも程なし

この歌の羊は動物の羊ではなく「羊のあゆ
み」のこと、すなわち人命のはかないことを
歌にしたもので、当時漢書から、また仏書か
ら「屠所の歩み」のことと了知していて作ら
れたものです。またの一首は恵慶法師（平安
中期歌人であるが生没不詳）の歌、

みちのくの白河こえる別れにし

ひつじさるさる行けどはるけし

この歌のひつじは動物の羊でなく方位のこと、ひつじさるは南西のこと、動物の羊はいなくとも、干支えとの未は使用されていきましたので白河の関の歌に詠じたものです。

芭蕉が元禄四年（一六九一）京都嵯峨さがの去来きょらいの落柿舎らくししゃに滞在したときの日記「嵯峨日記」の冒頭に、

元禄四辛未卯月十八日、嵯峨にあそびて去来が落柿舎に到いたる。

とあって、辛未と記しているのは、元禄四年が干支えとの上から辛未であったからで、動物の羊とは縁りがありません。また元禄三年（一六九〇）大津の国分山こくぶやまの幻住庵げんじゅうあんに住んだときの俳文「幻住庵記」は芭蕉最高の名文と称せられるが、その中ほどに、

山は未猿ひつじさるにそばだち、人家よきほどに隔り、

南薰峰なんくんぽうよりおろし、北風海を浸して涼し。とある、未猿は方角を示した言葉、西南の方角を指したものです。これ又動物の羊とは縁りがありません。

芭蕉、寛文十二年（一六七二）最初の句集「貝おほひ」に「田のひつぢばへ」と記るされているのは魯田ひつじだに羊穂ひつじほのでてきたことを指したものです。魯田の芭蕉の句は芭蕉翁句鑑につきぎの一句だけがあります。貞享三年（一六八六）の作といわれています。

ひつぢ田に霜の花見るあした哉

鎌倉へ行く人を見送ってと前書のある句で「芭蕉翁句鑑」に出ており、ひつぢ田は前記稲田の魯穂のことで、動物の羊とは縁りはありません。

水の感じがしますのでこの名が起きました。

しかしわが国には江戸時代まで羊の飼育はな
く、魚が食生活につながるところから、この
雲を鰯雲、鯖雲、鱗雲と称し、俳句の秋の季
題として親しまれてきました。

なほ上に鰯雲ある空路かな 高浜 年尾

妻がゐて子がゐて孤独鰯雲 安住 敦

鰯雲化野の墓隙間なし 藤井艸眉子

鯖雲や乾きつきたる岩の群 有働 亨

羊は喜んで紙をよく食べるので、参詣者が
紙をかんで山門の仁王や柱に投げつけるのが
あるから、これを羊になぞらえた川柳があり
ます。

又紙をかむかと仁王にらめつけ 作者不詳
稲を刈り取ったあとの刈り株に青い芽が出
たのを糶といい、再び穂が出るのを羊穂、糶
稲といひ晩秋の俳句の季題でもあります。

沼風や糶は伸びて穂をゆすり 石田 波郷
らんらんと落日もゆる糶かな 富岡 風生
緬羊の毛は毛織物にするため、春になって
刈り取るため、晩春の俳句の季題として「羊
の毛刈る」「羊剪毛」があります。

毛を刈りし羊の背の傷だらけ 久米 幸叢
転がして腹に日当てて羊刈る 川上百合子
睡蓮は未草ともいう。夏美しい花を開き、
花は白、黄、紅、紫などあるが、日中開いて
夕刻閉じ、未の刻、午後一時から三時頃まで
よく開くので、未草といい、晩夏の俳句の季
題であります。

睡蓮や鬢に手あてて水鏡 杉田 久女
羊の川柳は江戸時代古川柳にはない。羊の
群れは犬が統御します。

犬の指示通りに羊向きを変え 如 水

季語やぶにらみ(九)

初

詣

松の内を過ぎると、全国の初詣客のランキ
ングが発表され、ついでお賽銭の多寡まで
公表される。これなどは大きなお世話だと思
うが、マスコミによれば、世の中の景気の好
不況を占う指針になるのだそうだ。しかし、

木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

(随筆家)

果たしてそう言い切れるのであろうか。賽銭
の上がりがよければ好況と言い、不景気でも
賽銭が前年より多かったりすると、「不況の
時の神頼み」といったふうの都合のよいキャ
プションを付して変化をつけるだけで、パタ

ーン化された報道は新鮮味に乏しい。もっとも余程の突発事故でも起さない限り、後は当日の天候だけがニュースを左右する要素となるが、太平洋側はこの時期冬型の気圧配置で晴れる日が多く、多数の参詣客を集める社寺の多くも概ね太平洋側に点在しているから、あまり問題にはならない。その証拠に、古来元日に降る雨または雪を「御降^{おさがり}」^{おさがり}と云うて奇瑞としているのである。これは元日にお湿りがあれば、その年は豊穰であるという俗説に基づくものだが、「御降り^{おさがり}といへる言葉も美しく 高野素十」といった、豪雪地帯の人が聞けば目を剥きそうな句も生まれる。

初詣に三つの様式があるというのは、群馬大学の西垣晴次教授である。(一)その年の恵方に当たる社寺に詣でるもの (二)社寺のその年

最初の祭日に参詣するもの (三)恵方や祭日に関係なく著名な社寺に詣るもの——がそれで、これらに共通するのは人口が集中した都市を中心とする現象で、都市生活に伴う一つの社会現象であると断言する。

へ社会現象ねえ?!」論文を読み進むにつれて、成程と首肯する点も多々あったが、私は最初に「恵方」という言葉に躓いて、にっちもさっちも行かなくなってしまった。言葉そのものは知っていても、その概念が掴めないのである。例によって、早速辞典のお世話になるしかなかった。しかし、

広辞苑——古くは正月の神の来臨する方角。のちに曆術が入って、その年の歳徳神^{としとくじん}(その年の福德をつかさどる神。曆注の一)のいる方をいう。あきの方。↑塞^{ふさがり}。

日本国語大辞典——その年の縁起のよい方角。その年の干支によって定め、歳徳神の宿る方角。明きの方。陰陽道が日本に入る前は、前年の冬、最後の雷が最後に鳴り収まった方角を、次の年の良い方角と認める方法があったらしい。

と、両辞典には記されているだけで、五行説に十干十二支を絡らませて作るらしいことはおぼろげながら分かったが、恵方の定め方にまでは言及していない。

日本大歳時記にはやや詳しく、「兄方」「吉方」とも書き、エト（干支）のエのことで、塞がりの方に対して明の方をいい、万福・食物・財宝の豊かな方角と考えられている。陰陽道では方角を時計回りに十二支に分け、また十干を陰陽に分ち、甲・丙・戊・庚・壬の

五つを陽干、乙・丁・己・辛・癸の五つを陰干とする。陰の方には徳がなく、陽の方には徳があると考え、陰干つまりエトのト（弟）の年は己は甲に、辛は丙にというように、すべて陽干エ（兄）の方位に置き換える。だから兄方という。……と出ていて記述は更に続くが、己は甲以外に置き換えられないのか、また乙は甲に置き換えて甲乙（きのえきのと）という方位があるのか無いのかと考えて行くと、さっぱり分からないことだらけなのである。しかし、分からないのは私だけでなく、先人も恵方についてはあまり確固たる認識はなかったようである。「足の向く村が我等の恵方かな」と一茶は言い、高浜虚子が「恵方とはこの道をただ進むこと」と独歩の態度を表明したのに対し、「恵方とて人の歩める方へゆ

く」と橋本多佳子は自主性の無さを句にしている。我が道を行くにしても、あなた任せの道を歩むにしても、足の向く方を恵方と考えればいいのだと思うと、浅学菲才を棚に上げて、少しは気が楽になった。

西垣説は「初詣」について、集落や都市の形成を踏まえて論じられているが、私注を加えながらこれを再構成すると、

「集落がかつてまき（古代の氏族、近世の本家・分家の関係など）、かど（門、一家一門）と呼ばれる同一の血族集団で結ばれていたところは、氏族はそれぞれ門外不出の神を祀り、祭祀は一族が主家に参集して行われたから、他の氏族と共通の氏神・鎮守の社を持つことはなかったが、分家などでまきの戸数が増え、またまきに属さぬ者（多くは農奴か）が増えるに従っ

て、幾つかの集落が合同して外敵に当たる村に発展していった。蘇秦・張儀たらずとも、合従し連衡して自らの領域を死守するためには他氏族とも結ぶ必要が生じたのであるが、一方ではそれが新たな権力闘争を生んだことは、大化の改新や壬申の乱などの例を見るまでもなく、史書に明らかな通りである。壬申の乱以後律令制の実施で中央集権化が進むと、いままで同族で祀る神によって生活の安定を願っていた村人は、表面上は自らの氏神を捨て、初めて神を祀る場として社を建て、権力者に関わりのある神を勧請して村全体の氏神・鎮守として祀らざるを得なかったが、弱者が生き残るためには同族の絆より、地域の結び付き、ひいては中央の権力との結び付きを重要視する知恵が優先したのである。元

旦、氏神の社に参詣して、一年の安泰を願う、いわゆる初詣の習俗が発生したのはこの辺りの段階からではなかったか」

と西垣教授は推測し、更に論を進めて、江戸期商人が抬頭して都市部に大店おおだなが生じると、神の祀り方はまきの時代に戻ったと指摘しているのが、私には興味深かった。

大店の正月行事は、主人・番頭・手代・丁稚・小僧といった序列のもとに、かつてのまきのころ同様に主家に分家が集まって行われたから、これらの人々は除夜の鐘を合図に社寺に参詣するといった現象とは無関係であった。まきの時代と根本的に違うのは、分家と同族以外の暖簾分けされた他人が入っていることであつたが、これは大店としての結束を固めるために、一族に準ずる扱いをしていた

のであろう。しかし、大店に属するのは都市の住民のごく一部で、大部分は長居住まいの零細な庶民であつた。江戸などでは幕府が町を分割し、幕府ゆかりの神社の氏子区域を設定して、その区域の住民を祭礼などに参加せしめたので、半ば強制的に氏子に組み込まれたが、彼等がその神社を氏神として尊崇したかどうかは疑問である。また武家社会では、主君への年頭の礼があつたから、元旦の初詣はあり得なかつた。

初詣が盛んになったのは江戸中期以後で、都市部に人が集中したのは現代にも通じる現象であるが、貧富の差が一層顕著になったのもこの時期である。現代の都市の住民に氏子の觀念が稀薄なように、武家や大店の慣習に縛られない庶民は現世利益の願望が強く、ご

利益があると聞けば恵方であろうがなからうが、どの社寺へも出かけて行つた。だから、それを受け入れる社寺の側でも、それぞれ趣向を凝らして特色を出すのに努めたから、またそこへどっと人が集まつた。それにしても何でこうも人は群れたがるのであろうか。それについて西垣教授は、

「都市の初詣は年々盛んになっているが、初詣に見られる群衆には新年の華やかさと共に、なにがしかの寂しさが感じられる。それは都市生活で孤立し、正月だけでも共に生活の安定を望むという一点で共通する群衆のうちに身をおくことによるものであろう」

と、いかにも学者らしい結論づけをしているが、果たしてそれだけであろうか。私はこの現象を、将来に夢も希望も持てなくなった

時代が生んだ、「初詣病」という名の現代病ではないかと思っている。

症状は、流行に乗り後れることに異常な不安感を持ち、人が行くから俺も行く、人が持つから私も……と、何事も他人と同じようにしないと気が済まない。かといって、自分からリードする気力はなく、ただ「赤信号みんなで渡れば怖くない」式に、他人の後ろからついて行くだけで満足している。言うなれば、この病気の患者は無気力で没個性なのである。年相応の常識を持たず独りよがりで、ひとかけらの信仰心もないくせに依頼心だけは人一倍強く、自分の意のままにならぬと、「……してくれなかった」と逆恨みしてはばからない。そんな輩がわんさと初詣に押し付けてくるのだから、対応する神様仏様もご苦

勞なことである。参詣客の殆どは信仰心など持ち合わせていないから、若者の中には複数の社寺を駆け巡って、その数を誇ったりする者も出てくる。ばかばかしいと思うのは既にオジイで、数多を巡るのがトレンドなのだと言われれば返す言葉もない。若者の行動をなじるかたわらで、秘かにその活力を羨んでいるからである。

私自身は人波にもまれるのが嫌で、初詣には行ったり行かなかったり、行ったとしても松の内を過ぎてからが多い。それも行き当たりばったりで、ご神体やご本尊に頓着せず、ただ深々と一礼するだけでこれといった願い事をするでもないから、神仏にご迷惑をかけるのが取得だが、「御手洗の杓の柄青し初詣 杉田久女」、伊豆のどこかに、こんな静か

で奥床しいお宮かお寺があれば、初詣に行くのも悪くないなと思っている昨今である。

なお、「初詣」という季語が確立したのは意外に新しく、明治四十一年に刊行された「俳諧例句、新撰歳時記」(今井柏浦著)の「大人びて着こなしも言ひき初詣 小野白雲楼」が初出だという。明治五年に暦が太陰暦から太陽暦に変わり、ようやく定着した年代と軌を一にしているのは、それまでの「恵方詣まじり」という形体がすたれ死語と化したというよりは、恵方を気にしなくて済む参詣方法に吸収されたと考える方が妥当かもしれない。

篝火の一つが爆ぜぬ初詣

隆一

初詣の態度がいい加減なせいか、私の句帖に初詣の句は少なく、また見るべき句もない。
(この項終わり)

「それ、誰から聞きました」

「バラナ村のピーターですよ。村の入口に人骨がいっぱい積んであってね、びっくりした。そもそもは、ギフ高地で小用をはたそうと思ったらそこら中にホネが散らばっていて、できなかったことが始まりなんですがね」

と、私がいきさつのあらましを話すと、本田さんは、

「いや、この島ではヘンなことがいっぱいあるんですよ。きょう松浦さんたちは、丸山道ぞいの野戦病院跡に行ったでしょう」

それはルンガ川とテナル川にはさまれた草ぼうぼうの地点のことで、丸山道とはかつて第二師団が、正面攻撃をさけて

背後から米軍を衝く作戦のために作った、人一人がやっと通れる細い道のことである。私たちはギフ高地を見たあと、アウステン山の裾を通って、そこへまわったのであった。野戦病院といっても、日本軍が勝手にそうきめただけのことです、別にこれという建物があつたわけではない。飢えて痩せ細った兵士がてんでんばらばらに、草葺きの覆いの下に、あるいは露天に横たわっていたにすぎない所である。

「そこへゆく道、大変だったでしょう」
たしかに物凄かった。アウステン山から川まで降りるその坂道というのが、傾斜約三〇度以上もあるうえ、車の轍の跡どおりに三〇センチから四〇センチも抉

れており、しかも湿気をふくんだ粘土質がドロップとした感じで、ブレーキをかけるるとズルズルと滑るのだ。車はレンタルしたスズキの、四輪駆動のジープだったが、そのガタガタぶりから想像して、とつくの昔に日本でお払いばこになったやつが、この南海の島に超安値で売り飛ばされてきたに違いなく、しかもこの国には車検などという制度がないことを思いだして、私は恐ろしさの余り、一度は運転を放棄しようと思ったほどだった。その私をつかまえて、

「あるいは事故になるんじゃないかと思つて、無事な顔を見たときはホッとしたんですよ」

と本田さんに言われては、もうただ

「うーん」とうなるしかなかった。

だが、それはまだ序の口、つぎに本田さんが言ったことは、さらに凄かった。

「日本から、遺骨収集とか慰霊とかで団体さんがくるでしょう。かならず事故が起きるのですよ。それも事故なんて起きるはずのない平凡な所でね。ただ、きまつてそれは、激戦の演じられた場所なんですよ。だからあなたにも“気をつけなさいよ”とひとこと言おうと思つたが、かえつて気にされてはまずいかもしれんと思つてやめたんですよ。なんだか暗示にかけるような気がして」

本田さんが日本に帰ったとき、私は一夕、食事をともにしたが、そのとき本田さんは「あのあと、えらいのが起きまし

てね」と言った。私も事故のあったことは新聞で承知していたが、詳しいことは知らなかった。

それは昭和五十六年十月下旬のことだったという。

二十五日、戦没者慰霊塔の落慶法要が行われ、それに出席した八十七人が、翌日から二台のバスに分乗して戦跡めぐりを行った。事故はその二日目に起きたのだが、八十七人の中には往時の大本営参謀で皇族でもあった竹田恒徳氏（故人）や第七軍参謀の井本熊男氏、第三十八師団参謀・黒崎貞明氏らがいた。

事故の起きたバスには井本さんも黒崎さんも乗ったが、ただ竹田さんだけは、「ガ島の超常現象」を知る本田さんが、

元宮様に万一のことがあってはいけないと思い、自分の運転する乗用車に乗ってもらったという。

二十七日昼過ぎ、アウステン山の戦跡を見学したあと、昼食をとりに行は再びバスの人となった。出発してまもなく、下り坂にさしかかったとき、突然ブレーキがきかなくなったのである。運転していたのは私もガイドに雇ったことのある原住民の若者（名をど忘れした）で、彼はあわててエンジンプレーキをかけようとしたがきかず、サイドブレーキも駄目だった。道は下りで、スピードは刻々にましてゆく。

この道はアウステン山を境に北側も南側も下り坂になるのだが、彼らが不幸に

見舞われたのは、ちょうど私が悪戦苦闘した下りとは反対側にある南側の下り坂で、北側に比べればゆるやかだったが、それでも下りは下りである。一つ二つのカーブはハンドルさばきでしのいだらしいが、片側は山腹、片側は断崖という地点にさしかかって、もうどうにもならなくなつた。そのとき運転席の真うしろに座っていた黒崎さんが「山腹にぶつけろッ」と叫んだ。運転者がそのとおりにしたとたん、バスは反動で横転し、乗っていた人の大半は気を失ってしまった。重傷五人、軽傷二十五人に及んだという。(死者の一人もでなかったことは不幸中の幸いだが——不思議にもこれまで、事故はガ島で何度も起きているが、死者は

一人も出ていない——最重傷者は、運転していた原住民の若者だったという。彼は両腕を切断した。私は彼の行き届いたガイドぶりに感謝して、日本へ帰ってから、彼の欲しがっていたキャラバンシューズを贈っただけに、感慨無量のものがあつた。)

「そういうことがあつたんですよ。竹田さんを私の車にお乗せして、ほんとに良かったと思つてね」

と本間さんはその話を結んだ。

“ガ島の超常現象”はそれだけにとどまらない。

その二、三日後、夕食に招かれて本田邸に出向いたが、話はしぜんそこに集中した。それは本田さん自身の体験から

始まった。

「私がそのことに気づいたのは——ここへ赴任して間もなくでした。この家で寝ていたんですよ。すると真夜中、夢に兵隊さんがでてきて玄関に立ち「水を一杯、飲ませてくれ」というんですな。私は昼の仕事で疲れていたもんだから「水なら冷蔵庫にある。勝手に飲んでくれ」と言ったんですよ。そうしたら冷蔵庫の扉の開く音がして、「ああ旨かった」とか何とか言いながら出て行った——これ、すべて夢うつつの中の出来事ですよ。戦争がおわって二十年以上もたっているのに、兵隊さんがいるわけないんだから」

本田さんがガ島に来たのは、昭和四十

年代の半ばである。今は定年退職されたが、当時は大洋漁業の社員で、たしか南洋群島方面にいたと聞いた。ソロモン諸島国がイギリスから独立して間もなく、同国と大洋漁業が共同出資しカツオ漁業専門の「ソロモン大洋会社」が設立されるにおよんで、ガ島へ着任したのだった。

水揚げしたカツオはすべて、ガダルカナル島の真南、シーラーク水道をはさんで約二〇キロの海上にあるツラギ島の工場で缶詰にし、日本その他の国に輸出されて、現在は同国の大きな財源の一つとなっている。そのツラギ島は過ぐる大戦で、付属するガブツ、タナンボコ二島をふくめ、水上艇で編成された横浜航空

隊、陸戦隊の第八四警備隊、徴用の軍属から成る設営隊員の総計八〇〇名が全滅したところである。

本田さんの話がつづく。

「ところが朝起きると、冷蔵庫の水筒の水が半分ほどに減っているんですよ。私はいつも一杯にして寝る習慣があるから、これはおかしいぞとすぐに気がついた。けれども人間だから、忘れるということもありますわな。そう思って、その場は過ぎしたんですが、しばらくしてまた同じことが起きた。夢うつつの中に出てきたことも同じなら、水筒の水が減っていたことも同じ……」

これが本田さんが、戦死者の霊というもの

だったという。

（これらを「霊」と呼んでいいかどうかどうかについては、世界の新心理学者の間で、まだ結論に達していないそうである。それについてはまたのちにふれるが、ここではしばらくは霊としておく）

私はなるほどと思った。実は本田さんが最初に私たちをポハ川（日本軍名「勇川」のホワイトリバーだったかもしれない）の野戦病院跡に案内してくれたとき、本田さんはまず持参の線香に火をつけ、合掌をした。私はそのとき、ずいぶん信仰心の深い人だなという印象をもったのだが、じつはその裏にはこういう事実があったのだった。

私が南太平洋を取材してまわったとき

のソロモン諸島国の日本大使は、パプア・ニューギニア国駐箚特命全權大使の兼務で、大使は山口孝一郎氏だったが、まだガ島をご存じなかった夫人が一人でガ島を視察に訪れたとき、超常現象を体験された。

というのは、ソロモン国の一流ホテルは首都ホニアラのホテル・メンダナしかないのだが、山口夫人はそのレフトウイングにある特別室をチャージした。ところがその深夜、何者かに胸を圧迫されてうなされつづけ、恐怖と脂汗でまんじりともできなかつたというのである。夫人は翌日、さっそくライトウイングのレギュラールームに移ったそうだが、するともう何事も起こらなくなったという。不

審に思った本田さんがあとで調べたら、その特別室はなんと、激戦地の一つで日本軍名「小川」の真上にあったのである。小川は戦後間もなく涸れたので、ホテル建設敷地の一部に取り入れられたということだった。

私たちはパプア・ニューギニアの首都ポートモレスビーに立ち寄ったとき、商社のビジネスマン数人とともに大使邸へ招かれ、夫妻のご接待をうけたが、その話はでなかった。これからガ島へ取材にまわるわれわれの気持を察して、わざと触れるのを避けられたのかもしれない。それはともかく、私たちも同じホテル・メンダナに宿泊したのだが、はじめからライトウイングのレギュラールームだ

ったから、うなされるなどという経験は一切しなかった。

もしレフトウイングだったら、大使夫
人と同様、恐怖の夜を体験したかもしれ
ないという友人もいるが、これには私
は、ちょっと疑問を持っている。

というのが、本田さんは私がアウステ
ン山の北にある丸山道ぞいの野戦病院跡
から、無事、帰ってきたのを見て「ホッ
とした」といい、カメラマンの金子君は
私の運転ぶりをひどく褒めてくれたが、
私は心の中では、もっと別のこと——私
以外の目に見えない誰かが救ってくれた
のだと、考えていた。それは本田さん
が、戦跡訪問には必ずお線香を携行した
のと同様、私が取材の前に必ず一卷の経

を供養したことと、大いに関係があるの
ではないかと、漠然とではあるが、思っ
ていたことに通じる。

それを「実証する」といってもいいよ
うな出来事が、まもなく起きた。

(つづく)

竹 中 信 常 著

佛 心 凡 情

定価五〇〇円 送料二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

電話(〇三)三二六二―五九四四
振替(東京)一―八二四七

新年賀謹

浄土宗宗務総長

大田 秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺
慈光ビル(〇二七三)二三一四〇〇〇

埼玉工業大学

松川 文豪

鎮西学園理事長

鎮西高等学校校長

真和中・高等学校校長

上田 祐規

〒862 熊本市九品寺三一―一
電話(〇九六)三六四―八一七六

東山学園

学園長

常任理事

石井 俊恭

山崎 宏賢

西出 澄弘

上宮学園

理事長 小林 昭五

校長 小西 祐謙

〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一―一六

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤 密雄

〒248 鎌倉市長谷四―二―二八

電話 (〇四六七)二三一〇七〇三

FAX (〇四六七)二二―五〇五一

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場

誕生寺

〒709-36 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
電話(〇八六七二)八一―二二〇二

淑徳高校名誉校長

保元寺住職

里見 達人

〒111 東京都台東区橋場一―四―七

教安寺住職

野呂 幸進

川崎市川崎区小川町六二

寺内 大吉

萩市 常念寺

老隠 古本 超然

〒758 萩市下五間町一七

華陽院住職

社会福祉法人

日吉町保育園理事長

堀田 良謙

〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八

新年賀謹

龍泉寺住職

伊東 康雄

〒107 東京都港区南青山二一八―二五

大本山光明寺執事長
西念寺住職

北邨 謙順

〒250-02 南足柄市沼田三一五
電話 〇四六五(七四)〇五八八

回向院住職

本多 義敬

〒130 東京都墨田区両国二一八―一〇

賀 正

東海林 良雲

〒985 塩釜市南町一一―一

おてらはみなさんの相談所
桜と観音さまのお寺

浄心寺

小池 政雄

〒113 文京区向丘二一七―四

函館称名寺

須藤 隆仙

〒040 函館市船見町一八―一四

中島 真哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二一六―三八

旭運社大阿弥陀経寺

山田 智旭

〒590 堺市寺地町東四―一―一四
電話 〇七二二(三三)六一四〇

清岸寺

住職 原口 徳正

副住職 原口 正弘

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六―一

松庵寺内無為窟主

小川 金英

〒025 花巻市双葉町六一四

仏教福祉センターよるひる銀行

正覚寺住職

楠美 知行

〒030 青森市本町一一―一二

大善寺老住

裏辻 賢洲

〒82-13 福岡県宗像郡福岡町松原区

三九一四

新年賀謹

法然上人二十五靈場
第二番仏生山法然寺

細井俊明

〒761 高松市仏生山町甲三二二五

伝通院住職

吉川哲雄

〒112 東京都文京区小石川三一四一六
電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

圓光寺住職

加藤順底

〒020 盛岡市南大通三一二一四九

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二一一三一八

本郷昌清寺

前任職 服部仙順

住職 服部光順

〒113 東京都文京区本郷一八八三

檀王法林寺

だん王子供の家

信ヶ原良文

〒606 京都市左京区川端通三条上ル
法林寺門前町三六

浄運寺住職

野口善雄

〒376 桐生市本町六一三九八

西住院

戸川靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二二一四

電話(〇二八二)二二一〇八〇二

芳泉寺

柳楽真純

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん
〒386 上田市常磐城三一七―四八

光明寺

白幡憲佑

〒232 横浜市南区庚台六六(久保山)

〒440 豊橋市関屋町二二二

宗教法人 悟真寺

代表役員 立松 辨成

電話(〇五三二)五二一五五六六

新年賀謹

愚鈍院

中村眞道

〒980 仙台市若林区新寺三―一二―一七
電話 (〇二二)二五六―六〇五七

晴雲寺

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六―五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

〒600 京都市下京区寺町通
綾小路下ル中之町五八四―一

九品仏浄真寺

清水順碩

〒158 東京都田谷区奥沢七―四一―三

お骨仏の寺 一心寺

貫首 高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九
電話 (〇六)七七―一〇四四(代)

浄土宗宗議會議員

齊藤价洲

〒110 東京都台東区東上野五―一―六
宗源寺

大松寺

酒井亮貫

〒108 東京都港区三田四―一―三八
電話 (〇三)三四五一―二四九四

札幌新善光寺

太田隆賢

〒064 札幌市中央区南六条西二丁目

印刷一般

長谷川印刷(株)

〒114 東京都北区上十条二―一四―二

大道社

〒102 東京都千代田区飯田橋

一―十一―六

法然上人鑽仰会

法然上人鑽仰会

同人一同

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十七巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年十二月二十五日 印刷

平成三年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

新年賀謹

總本山 知恩院 門主 藤井実應	大本山 増上寺 法主 中村康隆	大本山 金戒光明寺 法主 稻岡覚順	大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺 法主 藤堂俊章	大本山 光明寺 法主 藤吉慈海	大本山 善光寺大本願 法主 一条智光
〒170 東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一 大正大学 電話(〇三)九一八―七三二―代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一―一二四―代表 通信教育部 四九一―〇二三九	大乗淑徳学園理事長 淑徳短期大学学長 長谷川良昭 〒174 東京都板橋区前野町五―五―一二 電話〇三(五三九二)八八二二	京都文教短期大学 学長大河内良孝 〒611 宇治市旗島町八〇

第五十七卷

正月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)

毎月一回一日発行

平成二年十二月二十五日印刷

平成三年一月一日発行